

思えてならない。太宰の謫居生活での救いようのない道真の精神状態を垣間見る思いがする。

## 総括

道真の我が子を詠んだほかの作品にも言及しながら「483慰少男女」の解釈を試みたが、そこに指摘できたことは、このような「公」「私」の「私」を主題とする詩には詠み手の精神状態が濃く反映しているという自明のこととの再確認である。「483慰少男女」も、その例外ではない。京より母親や兄弟姉妹から引き離されて、父親に伴ってついでに幼子を父親である道真は、何をもって慰めようとしたのか、それが痛いほど伝わる詩内容であった。自分たちよりより悲惨な状況にあった子供たちの例を出して、それよりは、まさに慰撫する道真の真意は、とりも直さずそれを自分に投影させ、古典籍の偉人の不遇と我を鑑み、今の我が身を鼓舞しようとする精神の葛藤が詠み手に強く迫ってくる作品であった。